

## 「自立、神様と主体的な関係」 ～あなたには主体性がありますか～

## Ⅱサム12：1～13、詩篇51編

昨日、ふるさと創生プロジェクトの農業体験がありました。農業は草との戦いであり、真夏には過酷な作業です。クリスチャンの人生も同じようにもうすぐ収穫だと思うと邪魔が入ったり、空からカラスが食べにきたりしています。農業においては最後に食するという楽しみがあるから頑張れるのです。クリスチャンの人生も同じように最後にものすごい祝福が待っているから今の苦しみを乗り越えることができるのです。カナの婚礼のように、最後に一番いい葡萄酒を水から作り出すような奇跡を見るようなものです。私たちの人生の最後にはすばらしいことがあると信じて進んでいるでしょうか。それを見ていれば、夏の日照りに耐えることができます。現代は豊かな時代となり、昔と比べ欲しいものは概ね手に入れることができるようになってきています。それは我慢を経験することがなくなってきたことかもしれません。それは忍耐することができない世代とも言えます。（Ⅱサム12：1～13）

ダビデが罪を犯した時に預言者ナタンが遣わされた時の話です。ダビデはナタンのたとえ話の時に、自分の罪に気づいていませんでした。私たちも今までの生き方が間違っていると気づいていない場合が多々あります。この時、ダビデは戦いの指揮を前線とっていたのではなく、城でしていました。イスラエルではありえないことでした。そして自分の部下の妻であったバテシェバを見かけ、気にいってしまい手をつけてしまいます。しばらくすると、バテシェバは妊娠してしまいます。その折、ウリヤが戦況報告に帰ってきたので家に帰させようと画策しますが、ウリヤは忠実な部下だったので、まだ戦っている人いるのに自分だけが家に帰ることは問題があると感じ、家に帰ることを断り城壁にとどまったのでした。そうすると妊娠したことを誤魔化せなくなり、ダビデはウリヤを殺すように前線に残してほかは下がるように命じ、ウリヤは死んでしまったのです。そしてダビデはバテシェバを妻として迎え入れました。これがダビデの罪になりました。神に愛され、人にも愛され、神に願えば何でも手に入れることができるにも関わらず犯してしまったのです。しかしダビデが違ったのが預言者ナタンが来た時に詩篇51篇に書かれているようにすぐに悔い改めたのでした。ヒソブを持って私を清めて下さいと祈っていますが、ヒソブとは過越の時に家のかもいに羊の血を塗るために使用したものです。これは罪が赦されるために用いられ現在では象徴ともいえる重要な存在になっています。イスラエルの民にとっての一番の罪は死体にふれた時でした。エルサレムの城壁の外側には貧しい人の死体が埋められている場所です。墓石などを買うことができないような貧しい人は特定することすらできない状況で埋められています。雨が降ったりしたら骨が地上に現れてしまうような場所でした。ですから過越の祭りの時、都上っている時に死体に触れてしまったら、7日間清めの儀式を行うために過越の生贄を捧げることができないことになってしまいます。しかしここでヒソブをもって清めさえすれば、赦されたのです。それくらいヒソブというものはイスラエルにとって重要な道具でした。ダビデは罪を指摘された時に祈ったのです。そして詩篇51編とは正しい悔い改めとはこのようなものであると教えているともいえます。罪に気づかないこともあります。罪に気づいた時はこのように祈ったのはダビデの信仰姿勢の現れでした。アダムとエバの時も罪を犯した後、神に悔い改めることができず責任転嫁をします。この善悪を知る木の実を食べてから人に悔い改めがすぐできないものへと変わってしまったかもしれません。私たちも相手が悪いの一点張りをしていないでしょうか。サウル王も戦う前にサムエルがいけにえを捧げに来るまで待てず、越権行為によって自らいけにえを捧げてしまいました。サムエルにその罪を指摘された時、サウルは言い訳を重ね、悔い改めることができませんでした。そして最後には民の前で面目を立てるために一緒に帰ってくれないかとも言っています。私たちは罪に対して敏感になることは大切なことです。そして私たちには罪を犯してしまう弱さがありますが、罪を認めたら悔い改めていかなくてはいけません。私は悪くないという思いにとどまっているのはよくありません。罪を犯す時、自分に必ず悪い部分があるのです。大きな罪に至る前には小さな罪があるのです。欲は戸口でこいしたうが、それを制していかなければいけません。また欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死にいたるのです。罪を犯す前というのはイライラしている時、何かに誰かにムカついた時、感情的になった時、嫉妬した時、妬んだ時、人から責められた時ではないでしょうか。しかしそこで素直になれば罪を重ねてしまうようなことにはなりません。ですから私たちは罪を素直に認め、悔い改めていかなくてはいけないのです。ヒソブとは謙遜、羞恥という意味があります。イナゴマメは質素、貧困という意味があります。杉は栄光、傲慢という意味があります。ヒソブと対比されるものが杉です。そして意味を見ていきますと長所が短所になりえたり、短所が長所になりえることは私たちに人間にも当てはまります。ヒソブの意味である羞恥は誰しもが持っているものです。これは劣等感に通じていくものです。ダビデのように劣等感を神の前に差し出せば、神からの賜物に気づき豊かな人になれるのです。私たちはこの羞恥の部分は十字架によって謙遜に変えられていくしかありません。ヒソブとは他の植物に比べたら、見栄えが良いわけではありません。しかし神は尊いものに用いているのです。私たちにヒソブでなく、十字架の愛こそ尊いものへと用いられるための最大の方法です。そして価値のないものが価値あるものへと変わります。だからこそ罪に気づかないとけません。私たちは羞恥からイエス様にある謙遜にいたらないといけません。私たちの内に傲慢や虚栄はないでしょうか？自分は悪くないと思っていないでしょうか。自分の敵は自分なのです。罪を犯すから悪魔につけいるスキを与えるだけなのです。罪がなければ悪魔は近寄ってこれないのです。ですから私にある罪を悔い改めて謙虚になることができればよいのです。自分が謝らない人は人から謝られても赦しません。多く赦されたものは多くを愛するものになります。サマリアの女のように自分の罪を言い当てた人がいると言えるでしょうか。羞恥心の方が先になっていないでしょうか。それとも主にあって謙虚になれるでしょうか。①**動機を探る**～たくなを捨てる。私たちは主体性がなくなっているのです。アダムが典型的な例です。そこから人は主体性が失われたのです。だからこそ、主体性を持ち、自立することが必要なのです。自立とは自分一人で生きることではありません。主体性を持つことです。神は様々な形で〇〇しなさいといひます。聞いた私たちはそれをどのように具体性をもっていくのかは一人一人考えなくてはいけないのです。罪を犯したダビデは主体性をもって詩篇51篇を祈りました。神の前に出るために主体的に悔い改めていきました。私たちは主体性がなく、人から聞いたままを行なっていきますが、人から命令されるは嫌いです。主体的に生きるのであれば、隣人と共に一緒に作り上げていきましょう。現代は悪魔が作り上げてきた世の中です。義務的にやればよいとの考えてしまう危険があります。また面目と自分の羞恥心と虚栄で行動してしまうように動機が間違わないようにしましょう。私たちは自分を罪人のかしらであると認識しているでしょうか。それともあの人よりは良いと比較の中で生きていないでしょうか。（ヘブル4：7）聖書では心を素直にした人と頑なにした人の差がでているのです。私たちは石の心になっていないでしょうか。動機が義務であった場合、愛は流れていきません。十字架も文句を言いながらだとしたら救いはないような気がします。逆ギレしながらゴルゴダを歩いても救いが薄いように感じます。同じように私たちも義務でしたことでは愛は流れていきません。どんな状況にあってもイエスキリストは正しく行動しました。私たちも正しい動機から行っていきましょう。②**どのようになりたいのか**。私たちはどのようになりたいのか願わないといけません。イエス様のどんな姿になりたいのか想像してみましょう。そして最初に出てきた姿を覚えておいてください。その姿が私にしてくれたイエスの行動（姿）です。まずはその姿に近づけていきたいと思えます。イエスさまは主体性を求めています。こうなりなさいと言いません。私がどうなりたいたいのかです。目の見えないバルテマイの前に立ったイエスは彼にどうなりたいたいのか聞いているのです。誰もが見えるようになることであると思えますが、しかしバルテマイからどうなりたいたいのかを聞いたのです。私たちはどうなりたいたいのでしょうか。それは自分勝手な思いではありません。神が私を作った時の姿に戻るこそ、私たちがどのようになりたいのかということではないでしょうか。私はどんな人でしょうか。どのような道を通り人生の終わりを迎えるのでしょうか。私たちの人生の中でまわりにどのような影響を与えたいでしょうか。贖われたものとしての価値を残せる人生にしたいと思えます。（ローマ4：5～7）何の価値のないものであってもイエスキリストによって義と認められ、赦されたのですから、人のことを指差している場合ではありません。ダビデの行動は神に赦されたのでソロモンが生まれたのです。ですからダビデにならぬ悔い改めなくてはいけません。③**素直に**。素直になりましょう。文句を言わないようになりましょう。素直がないと失敗した時のためにあちこちに保険をかけるようになります。神に頼ると言っているにも関わらず、別のものに頼る心があります。神の道を歩まなければなりません。そして神に教えられたのであれば、素直に従っていかなくてはいけません。そうすれば私たちの人生は今からでも良くなります。私たちの人生は慈しみと恵みが追ってくる人生になっていきます。ですから私たちはどうなりたいたいのか、今週神の思いを知り、主体的な歩みをしていきましょう。（要約者：平澤 一浩）